

二〇二二年五月二十八日

【原文】

故天爲之色、外蒼象木、內赤象火。

6 西北屬地。「故」萬物秋冬悉落下歸土。人民蛟行至秋冬悉入穴而居。故地之爲色、外黃白象土金、內含水「而」黑、象北行也。

東方南方位尊、上屬天、主理、爲君長師父。西「方」北方屬地、卑爲臣、爲後宮、爲民「」。故己者」甲之後宮也。甲、天也、王者之本位、故爲心星。心星、火也、屬南方。

10 丙爲火之長、取其大明者也、君之位也。辛者丙之後宮。甲者丙之父也。故己乃大皇后之宮也。辛者配丙、丙者甲之子、故辛者小皇后之宮也。丙者乃甲之適子、受受命之君也。

12 庚者屬乙、是國家諸侯王之夫也。壬者屬丁、是帝王女弟之夫也。癸者屬戊、是國大皇后之婦家也。

【校勘】

「西北」、作「西方北方」。

「屬地」、作「下屬於地」。

18 「萬物」前に「故」字ある。

「秋冬」、前に「至」字ある。

「歸土」、後ろに「也」字ある。

「爲色」、後ろに「也」字ある。

22 「內含水黑」、「內含水而異」に作る。『合校』注「黑原作異、今依鈔改」。

「理」、作「治」（高宗諱）。

24 「西北方屬地、卑爲臣…」、作「西方北方位卑、屬地、爲臣…」。

25 「爲民者」、作「爲民。故己者」。

「本位」、後ろに「也」字ある。

「故爲心星」、作「故甲爲心星」。

「心星、火也、屬南方」、作「心星、火也、爲王者、故東方亦爲王者之先也。心星、火也、行屬南方。」

「取其大明者也」、「取」作「最」。

「辛者丙之後宮」、作「辛者、屬丙、辛者、丙之後宮也」。

「甲者丙之父也」、「甲」作「申」。『合校』注「甲原作申、疑形近而譌、今依鈔改」。

「故己乃大皇后之宮」、作「故己迺太皇后之宮」。

「丙者甲之子」、後ろに「也」字ある。

「受受命之君」、作「受命皇之君」。

「國家諸侯王之夫」、「帝王女弟之夫」、「夫」作「埤」。『合校』注「按埤即壻字」。

「國大皇后」、「國」作「國家」。

【書き下し】

故に天 之れ色を為すは、外を蒼くし木に象り、内を赤くし火に象る。

西北 地に属す。万物 秋冬に至り悉く落ち下りて土に帰し、人民岐行 秋冬に至り悉く穴に入りて居る。故地 之れ色を為すは、外を黄白にして土、金に象り、内は水を含みて黒く、北行に象る。

東方南方 位尊く、上に天に属し、理むるを主り、君長、師父為る。西方北方 地に属し、位卑く、臣為り、後宮為り、民為る。故に己は甲の後宮なり。甲は天なり、王者の本位なり、故に心星と為す。心星、火なり、南方に属す。

丙 火の長為り、其の大明なる者を取るなり、君の位なり。辛は丙の後宮なり。甲は丙の父なり。故に己乃ち大皇后の宮なり。辛は丙に配^{めあわ}し、丙は甲の子なり、故に辛は小皇后の宮なり。丙は乃ち甲の適子なり、命を受くるを受くるの君なり。

庚は乙に属し、是れ國家の諸侯王の夫なり。壬は丁に属し、是れ帝王の女弟の夫なり。癸は戊に属し、是れ國の大皇后の婦家なり。

【現代語訳】

それ故、天は外側を青くして木になぞらえ、内側を赤くして火になぞらえるのだ。

西方（少陰・秋・金・白）と北方（太陰・冬・水・黒）は地に帰属する。そのため、秋冬になると、万物は散って土に帰り、人間から虫に至るまでの生き物は全て穴居する。故に大地は外側を黄白にして土、金になぞらえ、内側に水が含まれており、その色を黒くして五行の水になぞらえる。

東方、南方は位が高く、上天に属し、治めることを司り、君長、師父である。西方、北方は位が低く、大地に属し、臣下、後宮、民である。故に己は甲の後宮である。甲は上天であり、王者のいるべき位であり、故に心星にあたる。心星は火にあたり、南方にあたる。

丙はひのえであり、盛んに輝くことに因んでおり、君の位である。辛は丙の後宮である。甲は丙の父である（木は火を生ず）。故に己は大皇后の宮である。辛は丙の妃であ

り、丙は甲の子であるから、辛は小皇后の宮である。丙は甲の嫡子であり、授かった天命をさらに受け継ぐ君主である。

庚は乙に属し、国家の諸侯王（乙）の夫である。壬は丁に属し、帝王の妹（乙）の婿である。癸は戊に属し、大皇后（己）の実家（兄）である。

【注釈】

○外蒼象木、内赤象火

『漢書』曆律志上「大陽者、南方。南、任也、陽氣任養物、於時為夏。夏、假也、物假大、乃宣平、火炎上」「少陽者、東方。東、動也、陽氣動物、於時為春。春、蠢也、物蠢生、乃動運」971 大陽は、南方なり。南、になうなり、陽氣 物を養うを担い、時においては夏と為す。夏、假也、物 大に仮り、乃ち宣平なり、火 炎上なり。少陽は東方なり。東、動なり。陽氣 物を動かし、時においては春と為す。春、蠢也。物うごめき生じ、すなわち動運す。

なぜ外は木、中は火なのかが不明。自然観察から得た発想なのかもしれない。

○西北屬地…

『漢書』曆律志上「大陰者、北方。北、伏也、陽氣伏於下、於時為冬。冬、終也、物終臧。乃可稱。水潤下」「少陰者、西方。西、遷也、陰氣遷落物、於時為秋。秋、鞮也、物鞮斂、乃成孰。金從革」971 太陰は北方なり。北、伏するなり。陽氣 下に伏せ、時において冬と為す。冬は終なり。物終に臧す。すなわち稱する可し。水 潤下なり。少陰は西方なり。西、遷なり。陰氣、物を遷落せしむ。時において秋と為す。秋、収なり。物 収斂し、すなわち成熟す。

○萬物秋冬悉落下歸土

『老子河上公注』第四十五章「秋冬萬物靜於黃泉之下」179 秋冬、万物黄泉の下に静まる

○蚊行

『淮南子』天文訓「或生或死、萬物乃成。蚊行喙息、莫貴于人、孔竅肢體、皆通於天」282 或いは生まれ或いは死し、萬物乃ち成す。蚊行喙息、人より貴ぶもの莫し。孔竅肢體、皆な天に通ず

○己者甲之後宮

『左伝』昭公九年伝「火、水妃也」注「火畏水、故為之妃」疏「陰陽之書有五行妃合之說。甲乙木也、丙丁火也、戊己土也、庚辛金也、壬癸水也。木克土、土克水、水克火、火克金、金克木。木畏金、以乙為庚妃也。金畏火、以辛為丙妃也。火畏水、以丁為壬妃也。也水畏土、以癸為戊妃也。土畏木、以己為甲妃也。杜用此說、故云火畏水、故為之妃也。服虔云、火離也、水坎也、易卦離為中女、坎為中男、故火為水妃」

○心星

『史記』天官書「東宮蒼龍、房、心。心為明堂、大星天王、前後星子屬」 1295

『漢書』五行志上「季春昏。心星出東方、而昧、七星、鳥首正在南方、則用火」 1325 季春昏し。心星東方より出でて昧、七星、鳥首正に南方にあり、則ち火を用う

○受受命之君

『毛詩』大雅・文王有聲「文王受命、有此武功」

『尚書』召誥「惟王受命、無疆惟休、亦無疆惟恤」 2126 惟れ王 命を受くること、疆り無く惟れ休なり、亦た疆り無く惟れ恤えん。

【原文】

十干各有所屬、地主之十二支云何哉。

天之爲法、陰陽雖行、相適者各自有家。天之爲法不同、不舉家相隨而止爾。甲者以寅爲家、乙者以卯爲家、丙者以午爲家、丁者以巳爲家、戊者以辰「戌」爲家、己者以「丑」未爲家、庚者以申爲家、辛者以西爲家、壬者以子爲家、癸者以「亥」爲家。故天道反行理、地道止也。故有分土、反無分民。盖有國「土、而無國」。故天地不移。天反一日一夜、周流一竟、行之爲常。故十二支各有其處、不隨干轉也。

【書き下し】

十干 各おの属する所有り、地主るの十二支はいかんや。天の法を為すは、陰陽行うと雖も、相い適する者各おの自ずから家有り。天の法を為すは同じ、家を挙げ相い随わずにして止まるのみ。甲は寅を以て家と為し、乙は卯を以て家と為し、丙は午を以て家と為し、丁は巳を以て家と為し、戊は辰戌を以て家と為し、己は丑未を以て家と為し、庚は申を以て家と為し、辛は酉を以て家と為し、壬は子を以て家と為し、癸は亥を以て家と為す。故に天道 反行して理め（反りて理むるを行い？）、地道は止まるなり。故に分土有るも、反つて分民無し。盖し国土有るも、国無し。故に天地移らず。天反一日一夜、一竟を周流し、之れを行うは常と為す。故に十二支各おのその処有り、干に随い転ざるなり

【訳文】

十干はそれぞれ属する所がある。地に属する十二支はいかがでしょうか。

天の法則は、陰陽の配当が行われているが、一对になった十干（相対的な位置が決まっている星のように）はそれぞれの居場所にいる。地？の法則も同じだが（五行の要素の一致する者が陰陽に基づいて一对になったり、それぞれの場所が決められていたりする）、十干

(つまり天の巡りに) 従わずに、止まっている点においてのみ異なっている。甲は寅を家とし、乙は卯を家とし、丙は午を家とし、丁は巳を家とし、戊は辰・戌を家とし、己は丑・未を家とし、庚は申を家とし、辛は酉を家とし、壬は子を家とし、癸は亥を家とする。故に天道は巡って(万物を) 治め、地道は止まる。故に境界が定められた封土はあるが、定められた土地でずっと暮らして移居しない民はいない。故に国土は確かに存在するが、国というものには存在しない。故に天地は不変なものである。天は常に巡っており、一昼夜巡ると、ちょうど一回りになる。故に十二支はそれぞれ定められた場所に居り、天干に従わずにとどまってる。

【校勘】

「十干各有所屬」、作「今十干已解，各有所屬」。

「地主之十二支云何哉」、作「願聞地之十二支當云何哉」。

「天之爲法」、前に「善耶然」三字ある。

14 「相適者」、作「相過事者」。

楊寄林は「それらの、交替を経験し、自ずから自身の形態と情状を形成した事物」と訳している。

17 「天之爲法不同」、作「天之爲法同」。採用。また「天」字に疑問。

18 「不舉家相隨而止爾」、作「不舉家悉相隨而止耳」。

楊寄林は「天之爲法、同不舉家、悉相隨而止爾」と読み、「皇天がその法則を形成するにあたって、同じ属性を持つものは本家の外に別に一家を構えず、全て相い従って止まる」と訳している。

22 「戌者以辰爲家」、「辰」作「辰戌」。採用

23 「己者以未爲家」、「未」作「丑未」。採用

24 「癸者以丑爲家」、「丑」作「亥」。採用

25 「天道反行理」、作「天道者反行治也」。

「地道止」、作「地道者止也」。

27 「蓋有國」、作「蓋有國土而無國」。採用

「天地不移」、作「天地者不移」。

「行之爲常」、作「行之以此爲常」。

30 「各有其處」、作「□居其處」。『合校』注「各原書空白無字、今依鈔補」。参考になった
「不隨干轉」、作「不隨十干而行」。

【注釈】

○相適者各自有家

『太平經鈔』卷二「元氣有三、名太陽太陰中和。形體有三、名天地人。天有三名、日月星、北極爲中也。地有三、名爲山川平土。人有三、名父母子。治有三、名君臣民。欲太平也、此三者常當腹心、不失銖分、使同一憂、合成一家、立致太平、延年不疑矣」^{8a}

○甲者以寅爲家…（甲と寅が一家を成すと訳した方がいいかもしれない）

『淮南子』天文訓「甲乙寅卯、木也。丙丁巳午、火也。戊己四季、土也。庚辛申酉、金也。壬癸亥子、水也」²⁷⁷

『淮南子』時則訓「季春之月、招搖指辰」「季夏之月、招搖指未」「季秋之月、招搖指戌」「季冬之月、招搖指丑」^{388～429}

『太平經鈔』卷四「子寅辰午申戌、陽也、主生。丑卯巳未酉亥、陰也、主養」^{13b}

○天道反行理

『周易』謙・彖傳「天道下濟而光明、地道卑而上行。天道虧盈而益謙、地道變盈而流謙、鬼神害盈而福謙、人道惡盈而好謙」^{31a} 天道は下濟して光明なり。地道は卑くして上り行く。天道は盈を虧きて謙に益し、地道は盈を變じて謙に流し、鬼神は盈を害して謙に福し、人道は盈を悪みて謙を好む

また、前掲原文「東方南方位尊、上屬天、主理」を参照。

○地道止也

地道は、前掲『周易』謙・彖傳を参照。

『禮記』樂記「著不息者天也、著不動者地也。一動一靜者天地之間也」^{1532a} 休まざるを著すは天なり、動かざるを著すは地なり。一動一静は天地の間なり

○有分土反無分民

『白虎通』五行「有分土、無分民、何法。法四時各有分、而所生者道也」¹⁹⁷ 分土有るも分民無し、何をか法らんや。四時に法り各分有りて、生ずる所は道なり

『漢書』地理志下「古有分土、亡分民」注「有分土者、謂立封疆也。無分民者、謂通往來不常厥居也」¹⁶⁰ 古は分土有も、分民亡し、分土有るは封疆を立つを謂うなり。分民無きは、通じて往來し、常にそこに居らざるを謂うなり

○天反一日一夜、周流一竟

『論衡』說日「天、日行一周」「儒者說曰、日行一度、天一日一夜行三百六十五度」⁴⁹⁹、⁵⁰¹

『周易』繫辭下「易之爲書也不可遠、爲道也屢遷、變動不居、周流六虛」^{89c} 易の書爲るや遠ざく可からず、道爲るや屢々遷り、變動してまらず、六虚に周流す

○行之爲常

『荀子』天論「天行有常，不為堯存，不為桀亡」306 天行に常有り、堯の為に存せず、桀の為に滅びず。

【参考】

『太平經合校』卷六十九「天讖支干相配法第一百五」（中華書局、一九六〇年、二六四～二六八）

故天爲之色，外蒼象木，內赤象火。

8

天地之格讖，〈起〉西方北方，下屬於地。故萬物至秋冬，悉落下歸土也。人民蛟行至秋冬，悉入穴而居。故地之爲色也，外黃白象土金，內含水而異，象北行也。〈止〉真人知之耶？「唯唯。」

11

「天之格讖，〈起〉東方南方位尊，上屬天，主治，爲君長師父。西方北方位卑，屬地，爲臣，爲後宮，爲民。故己者，甲之後宮也。甲，天也，王者之本位也，故甲爲心星。心星，火也，爲王者。故東方亦爲王者之先也。心星，火也，行屬南方。〈止〉比若日出東方，而位在南方也。真人知之耶？」「唯唯。」「行，子已知之矣。」

12

「天之格讖，〈起〉丙爲火之長，最其大明者也，君之位也。辛者屬丙，辛者，丙之後宮也。〈止〉真人知之耶？」「唯唯。」「行，子已知之矣。」「今己亦爲皇后，辛亦爲皇后，何謂也？」「善哉，子之難也，得天讖訣意。然己配甲，〈起〉甲者，丙之父也，故己迺太皇后之宮也。辛者配丙，丙者，甲之子也。故辛者，小皇后之宮也；丙者，迺甲之適子，受命皇之君也。真人知之耶？」「唯唯。」「行，真人已知之矣。」「庚者屬乙，是國家諸侯王之埤也。壬者屬丁，是帝王女弟之埤也。癸者屬戊，是國家太皇后之婦家也。」〈止〉「善哉，真人已知之矣。」〈起〉「今十干已解，各有所屬，願聞地之十二支當云何哉？」「善耶！然天之爲法，陰陽雖行，相過事者各自有家。天之爲法同，不舉家悉相隨而止耳。甲者以寅爲家，乙者以卯爲家，丙者以午爲家，丁者以巳爲家，戊者以辰戌爲家，己者以丑未爲家，庚者以申爲家，辛者以酉爲家，壬者以子爲家，癸者以亥爲家。故天道者，反行治也。地道者，止也。故有分土，反無分民，蓋有國土而無國。故天地者不移，天反一日一夜周沅一竟，行之以此爲常。故十二支□居其處，不隨十干而行也。〈止〉子知之耶？」「唯唯。」